F2-59

手賀沼沿岸の土地利用変遷に関する基礎的研究
—柏市及び我孫子市の土地利用施策に着目して—
A Basic study on the a land-use change on Lake Teganuma coast Focusing on land-use measures in Kashiwa city and Abiko city

○岡本祐太郎[1]，阿部貴弘[2]
*Yutaro　Okamoto[1]，Takahiro　Abe[2]

Abstract: Because Kashiwa City and Abiko city contrast the land use on the coast of Lake Teganuma, we will clarify the factors. As a result of survey, I think that the difference in land use measures since the invasion of the railway station in the Meiji Period appears as a difference in current land use.

１．はじめに

千葉県北西部に位置する手賀沼では「手賀沼・手賀川活用推進協議会」が設立され，市，県，国の連携により，手賀沼・手賀川周辺地域の豊かな自然や文化的資源を有効に活用した地域の魅力向上に努めている．

ところが，平成 27 年 6 月に協議会が報告した「つながるウォーターサイド TEGA」によると，手賀沼周辺地域について，柏市は「農業に触れ，体験できるエリア」と位置づけ，手賀沼の周りに残っている農業，自然，文化を生かした事業を展開している．一方，我孫子市は「買い物やスポーツが楽しめるエリア」として，観光施設誘導方針を定めている．つまり，手賀沼をはさんで向かい合う両市が，手賀沼沿岸の土地利用に関して，対照的な方針を打ち出している．こうした方針の違いは，はたしていかなる背景・要因によるものであるのか．本研究では，おもに両市の土地利用施策に着目して，対照的な土地利用に至る背景・要因を明らかにすることを目的とする．

２．研究方法

本研究では **Table 1** の文献調査に基づき，手賀沼を取り巻く社会背景，行政施策，周辺住民等の活動，開発動向，産業の変遷を読み取る．さらに，参謀本部陸軍測量局により作成された「迅速則図」及び国土地理院により作成された「旧版地形図」を基に，2 市の市街地形成過程を精緻に分析した（**Table 2**）．

Table 1. List of historical materials used in this study

1）美しい手賀沼を愛する市民の連合会：「手賀沼年表」，高木繁吉，2001
2）柏市史編さん委員会：「柏市史　沼南町史近代史料」，柏市教育委員会，2000
3）柏市史編さん委員会：「柏市史　近代編」，柏市教育委員会，2000
4）沼南町史編さん委員会：「沼南町史 Ⅰ」，沼南町役場，1979
5）我孫子史編さん委員会：「我孫子市史　近世篇」，我孫子市教育委員会，2005

Table 2. List of old maps used in this study

都市名	作成年代
取手驛	1897(M30)
流山	1927(S3),1952(S27),1967(S42),1984(S59),1996(H8)
取手	1927(S3),1949(S24),1967(S42),1985(S60),1996(H8)
白井	1921(T10),1952(S27),1967(S42),1987(S62),1996(H8)

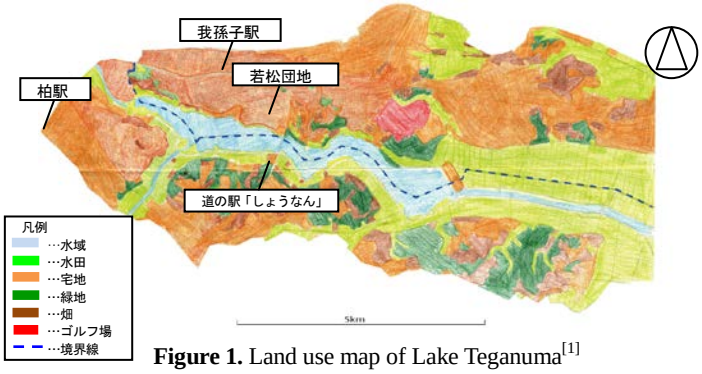

Figure 1. Land use map of Lake Teganuma[1]

３. 調査・分析結果

我孫子市，柏市，国・県という主体別に鉄道，道路，農業，漁業，住宅開発，観光開発の視点から手賀沼に関わる出来事を経年的に整理した（**Table 3**）．それを基に，現在に至るまでの土地利用の変化を特徴づける 6 つの期に区分し変遷を理解した（**Table 4**）．

４. まとめ・考察

柏市及び我孫子市の手賀沼沿岸の土地利用施策に着目すると，まず，近世の第一期には，新田開発のため，両岸ともに手賀沼の干拓に取組んでいた．この時期，手賀沼及びその沿岸，漁業も含めた生産の場として位置づけられていたと考える．

第二期に入ると，徐々に両岸の土地利用施策に違いが生じ始める．鉄道網の発展を背景として，鉄道駅誘致による宿場の衰退を防ごうとした我孫子市側では，手賀沼の景観に魅了された文化人の移住が進み，手賀沼沿岸は別荘地としての色合いを強めていった．一方，柏市側は，第二期に入っても農地が広がり，産業の場

１：日大理工・学部・まち　２：日大理工・教員・まち

Table 3. Chronology of Lake Teganuma basin

期	年号	我孫子	柏	国・県
第一期	1665(寛永 5)年	万屋治右衛門が官に請願し干拓を始めるが、後に計画倒れとなる		
	1671(寛永 11)年	江戸の商人、海野屋作兵衛ら17人の商人が手賀沼に圦樋と堤を設置し，閉鎖水域とする		
	1727(享保 12)年	手賀沼に千間堤を築くが，洪水により破壊される		
	1785（天明 5）年	田沼意次が企図の手賀沼干拓を起工する		
	1786(天明 6)年	手賀沼は薪俵圦樋、木下前圦樋が破壊して大洪水となる		
第二期	1896(明治 29)年	我孫子駅開業	柏駅開業	日本鉄道土浦線開通
	1901(明治 34)年	成田鉄道 我孫子-安食間開通		
	1944(明治 44)年	嘉納治五郎が転居		
	1914(大正 3)年	柳宗悦が転居		
	1915(大正 4)年	志賀直哉が転居		
	1916(大正 5)年	武者小路実篤が転居		
	1920(大正 9)年	中勘助が転居		陸前浜街道が国道6号線となる 農商務省が国営手賀沼干拓計画を発表
	1922(大正 11)年	滝井幸作が転居		
	1923(大正 12）年		北総鉄道船橋線開通、高柳駅開業	
第三期	1926(大正 15)年			食糧難解決のため手賀沼の開墾計画を立てる
	1927(昭和 2)年	手賀沼国営干拓反対運動が起きる		福永千葉県知事 手賀沼を視察
	1934(昭和 9)年			観光の便を図るため，沼に架橋計画を立てる
	1935(昭和 10)年	県立手賀沼保勝会を設置		内務省は手賀沼を県立公園計画区域に指定
	1936(昭和 11)年	我孫子町長が観光計画を立てる		
	1937(昭和 12)年	柏・我孫子・布佐町長および手賀沼普通水利組合がオリンピックボートレース場を手賀沼に誘致する		
	1939(昭和 14)年		手賀沼沿岸区域に都市計画案を出す	
	1940(昭和 15)年			東京オリンピック開催予定（中止）
第四期	1945(昭和 20)年			農林省直轄の手賀沼干拓事業が閣議決定
	1954(昭和 29）年	手賀沼にボートレース場の建設促進を陳情するが、干拓が優先となる		
	1955(昭和 31)年	農水省は、補償金を払い、手賀沼漁業協同組合の一部漁業権の消滅に踏み切る		
	1957（昭和 33）年			国道6号線，全線開通
第五期	1962（昭和 37）年	我孫子側の水域を埋め、手賀沼ディズニーランドが計画される		
	1964（昭和 39）年	工場・住宅による汚水により漁民の生活権が問題化 我孫子と柏を結ぶ手賀大橋が完成する	豊四季の大型団地の入居開始	東京オリンピック開催
	1966(昭和 41)年		沼南町工業団地が建設	
	1968(昭和 42)年	ディズニーランドの計画は失敗，計画地は住宅地へと変更		
	1969(昭和 43)年	手賀沼漁業組合は柏市にフィッシングセンターを建設し、獲る漁業から育てる漁業へ転換する		国営手賀沼干拓工事完成 県道船橋-取手全線舗装
	1970(昭和 45)年	手賀沼は流れ込む下水によって釣った魚が食べられず		減反政策 国道16号線開通
	1974(昭和 49)年			手賀沼汚染ワースト全国一位
	1976(昭和 51)年	手賀沼においてヘドロ浚渫が開始		大津ヶ丘団地入居開始
	1978(昭和 53)年	我孫子市民が合成洗剤による手賀沼の浄化を訴える		
	1981(昭和 56)年			常磐自動車道柏-矢田部間開通
第六期	1982(昭和 52)年		手賀沼湖岸にサイクリングロード開設	
	1984(昭和 54)年	手賀沼レクリエーション協議会により、あゆみの郷構想を発案		
	1985(昭和 60)年			常磐自動車道と首都高速6号線とつながる
	1987（昭和 62）年		手賀の丘公園，完成	沼南町（柏市）「千葉県むらぐるみ農業推進集落」に指定
	2001(平成 13)年		道の駅「しょうなん」完成	
	2002(平成 14)年			手賀沼水質が改善，全国ワースト１を脱出
	2005(平成 17)年		柏市と沼南町が合併	
	2013(平成 25)年	手賀沼を核として史跡や文化財の集積する地域をリーディング地区に設定		
	2016（平成 28）年	手賀沼観光施設誘致方針を定める	手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会設立	

として利用されていた．

第三期には，我孫子市側では，第二期に形成された別荘地としての特性を踏まえ，手賀沼の景観を生かしたリゾート開発が検討されたが，柏市側では，沿岸の緑地を生かした公園整備や住宅地整備が検討された．

戦後の第四期には，食糧増産のために両岸において手賀沼の干拓が進められたが，第五期に入ると，我孫子市側を中心に再びリゾート開発への関心が高まった．しかし，都市化に伴う生活排水や工場排水，さらに干拓による自然の浄化機能が低下したことで手賀沼の水質汚濁問題が表面化し，リゾート開発は頓挫した．

Table 4. Explanation of each period

第一期	干拓難航期 ・江戸から幕末明治期にかけて，万屋治右衛門をはじめ，多くの技師が手賀沼の干拓による新田開発に挑む ・度重なる洪水が相次ぎ，大きな成果はあがらず，戦後まで干拓事業は停滞する．
第二期	文化人来訪期 ・日本鉄道会社が設立され，土浦線（常磐線）の開通計画が立てられると、それぞれ宿場町の繁栄を目指し，我孫子駅は飯泉喜雄，柏駅は小柳七郎によって鉄道の誘致運動が行なわれる．[2]その努力が功を奏し，駅が開業し，町の衰退は防がれる． ・明治後期には嘉納治五郎をはじめ，手賀沼の景観に魅了された多くの文化人が我孫子の地に転居する． ・大正中期に北総鉄道が開通され、柏駅の南東に位置する高柳駅が開業する。
第三期	リゾート開発期 ・大正中期から食糧難の問題から手賀沼の開墾計画を立てる． ・我孫子に手賀沼畔に別荘を持っていた朝日新聞の記者杉村楚人冠は、「手賀沼保勝会」を結成し、干拓反対運動の端緒を開く。 ・福永千葉県知事は「手賀沼の風致を生かして利用したい」と述べ，干拓に反対する意向を示す． ・手賀沼の干拓に進展が見ないうちに，県や内務省によって手賀沼の景観の評価が高まると，地元において手賀沼を干拓するよりも観光地として利用する動きが現れる． ・我孫子町長は東京オリンピックを四年後に控えたため、手賀沼にボート会場を誘致し観光ホテルを建設する計画をした。 ・柏市は我孫子市を含めた地域を手賀沼沿岸緑地帯とし、理想の公園や住宅を造るという都市計画案を内務省に提出し，認められる。
第四期	食料増産期 ・戦後，国は閣議決定で大規模干拓政策を決定した．手賀沼，印旛沼も当然その対象となり，「食」と「職」という大義名分の前には「手賀沼の景勝を守る」というような反対運動も起こらず，観光地計画に対しても干拓が優先となる．
第五期	水質汚濁期 ・手賀沼沿岸開発協議会は全日本観光開発会社を設立し，我孫子市若松地区周辺の手賀沼の一部を埋め立て，手賀沼ディズニーランドの計画を立てるが，周辺住民や自治体の反発が日に増していき，開発計画は中止となり住宅地への転用が決定した。[3] ・干拓工事が終了して間もなく、減反政策が始まり米の生産が抑制される。 ・都市化に伴う生活排水，工場排水質汚濁が問題となったことで漁業は衰退し，観光地としての注目も薄れていった． ・ヘドロ浚渫を始めとした様々な浄化対策や住民による浄化運動が行われた．
第六期	新観光開発期 ・我孫子市，柏市，印西町，白井町，沼南町で構成する「手賀沼地域観光レクリエーション振興対策協議会」は「あゆみの郷」構想を計画した．これまでの拠点や目玉の開発によって，一気に観光レクリエーション客を誘致しようという開発構想から潜在している地域資源を利用し，レクリエーション需要にこたえようとする構想に変える．[4] ・現在に至るまで，柏市は農地が拡がっているため自然を生かした事業を展開する一方，我孫子市は文化人の住まいを拠点として飲食・物販施設やレクリエーション施設の誘致を行っている．

その後，第六期に入ると，手賀沼の水質改善を背景として，我孫子市側では，三度観光開発が議論され，レクリエーション施設の誘致が進められている．一方，柏市側は，既存の農地や自然を生かしたレクリエーションの展開が議論されている．

このように、柏市と我孫子市では、明治期の鉄道駅誘致以来の土地利用施策の差異が、現在の土地利用の違いとして表れていると考える。

５. 今後の課題

今後の課題としては，たとえば我孫子市の鉄道駅誘致の経緯や手賀沼保勝会の活動経緯などを詳細に把握することで，土地利用の背景等をより精緻に分析する必要がある．

６．参考文献

[1] 柏市役所：「柏市都市計画図」，2017

[2] 我孫子教育委員会市史編さん室：「我孫子市史研究　第１０号」，我孫子市教育委員会，1986，p117～p148

[3] 田口了麻ほか：「手賀沼ディズニーランド開発計画はなぜ失敗したのかー戦後 とポスト戦後の狭間でー」，第 28 回，日本観光研究学会全国大会学術論文集 ，2013 年 12 月， p177～180

[4] 千葉日報，昭和５９年 11 月